

<b>Title</b>	「手記」と「遺書」のあわい(一)：夏目漱石『こころ』の構造と文体をめぐって
<b>Author(s)</b>	黒木, 章
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 15(1): 144-125
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=199">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=199</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 「手記」と「遺書」のあわい（一）

——夏目漱石『「こころ」』の構造と文体をめぐって——

黒木 章

【お断り】許される紙数の関係で、これは標題にした拙論の前半部分である。

### はじめに

『「こころ」』に関する論考は、文字通り汗牛充棟、小説の本体が見えなくなるほどにさまざまの見解が出されている。わたくしはこれらの論考に新たに付け加えるべき何物かを持ち合わせているわけではないが、できるだけ素直且つ素朴な読みを心掛けることでいくつかの問題を考えてみたい。

この小説は、先生の死を告げる遺書を受け取ってから数年後に主人公の「私」が書いた手記という体裁になっている。物語としてはサスペンスに満ちており、遂には自殺する先生の過去を決って人間の罪をあばく展開には迫力もある。文体や作品の構成について日本の近代文学史の観点から見ても興味深い。しかし、これを作品としての纏まり、例えば物語の展開と主題の深まりという点からその構造を見ると、分

かり難い小説だという印象がぬぐえない。なぜだろうか。

漱石は、三部構成の一つになる「先生と私」の部分つまり「私は淋しい人間です」《上七、十四》と語りまた「私は倫理的に生まれた男です」《下二》と書いた先生の謎に迫ろうとする大学生の「私」とが実際に交流した三年半か四年間程度の時間を先に出して、その中で先生と「私」とが交わした遣り取り——（先生）「あなたは私の思想とか意見とかいふものと、私の過去とをごちゃごちゃに考えてゐるんぢやありませんか」、（私）「先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです」、（先生）「あなたは大胆だ」、（私）「ただ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたのです」、（先生）「私の過去をあばいてもですか……あなたは本当に真面目なんですか……私は過去の因果で、人を疑りつけてゐる。だから実はあなたも疑つてゐる。然し何うもあなた丈は疑りたくない……私は死ぬ前にたつた一人で好いから、他を信用して死にたいと思つてゐる。あなたは其たつた一人に

なれますか。なつて呉ますか。あなたは腹の底から真面目ですか、（私）もし私の命が真面目なものなら、私の今いつた事も真面目です、（先生）「よろしい…話ませう。私の過去を残らず、あなたに話して上げませう…しかし今は話せないんだから、其積であててください。適当の時機が来なくちや話さないんだから」《上三十一》という場面を先に描く。これを受けて後に先生が「私」に遺書を送り届ける。そして先生の遺書を受け取って数年後の「私」が、先生夫妻と「私」とが交流した時間と先生の遺書に書かれていたことを反芻しつつ「手記」を書くという構成に仕立てている。もちろん、読者は物語の前後関係としてこの手続きを理解できる。しかし、右に示した先生と「私」との遣り取りが、物語内部における人物相互の批判と反批判によつて主題を展開するという方法を制限する縛りになっているだけでなく、実は作者が初めに構想したはずの物語を困難にすることになったのではないかと思われる。

次に、先生が遺書の末尾部分に「此の手紙が貴方の手に落ちる頃には、私はもう此世には居ないでせう。とくに死んでゐるでせう」《下五十六》と書くのはよいとしても、作者は、遺書の冒頭部分で先生に「あなたは私の過去を…あなたの前に展開して呉れと逼つた。私は其時心のうちで、始めて貴方を尊敬した…私の心臓を立ち割つて、温かく流れる血潮を啜らうとしたからです」と言つて「私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上ます。然し恐れては不可せん。暗いものを凝と見詰めて、その中から貴方の参考になるもの

を御攫みなさい…是から發達しやうといふ貴方には幾分か参考になるだらうと思ふのです…私は今自分で自分の心臓を破つて、其血をあなたの顔に浴せかけやうとしてゐるのです。私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です」と書かせる直前で特に「其上私は書きたいのです。義務は別として私の過去を書きたいのです…私は何千萬とある日本人のうちで、ただ貴方丈に、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと云つたから」《下二》と書かせている。「過去の因果で人を疑りつけてゐる」と言いながら「死ぬ前にたつた一人で好いから他を信用して死にたい」とも言つていた先生がやつと見つけた「たつた一人」の「私」に向けて己れの命をかけて遺書を書くこと、いわば先生の「書く行為」の喜びと闘いともいふべき問題に言及している。この部分も注目されてよい。なぜなら、漱石は、このような形でこの小説の主題或いは創作の意図を明らかにするだけでなく、先生の筆を借りて漱石自身の「書く行為」の喜びと闘い——これは、例えば「僕は世の中を一大修羅場と心得てゐる。さうして其内に立つて華々しく打死をするか敵を降参させるかどつちにかして見たいと思つてゐる…世の中は僕一人の手でどうもなり様はない。ないからして僕は打死をする覚悟である。打死をして自分が天分を尽して死んだといふ慰藉があればそれで結構である…どの位人が自分の感化をうけて、どの位自分が社会的分子となつて未来の青年の血肉となつて生存し得るかをためしてみたい」（明治三十九年十月二

十三日 狩野亮吉宛書簡）を想起させる——というようなことを書いてある節があるからである。

この拙論は、「こころ」の構造と文体の分析を試みながら、この小説の作品としての分かり難さを考察し、先生と「私」の「書く行為」の意味さらには漱石のそれをも考えてみようとするものである。

ただ、予め断っておかなくてはならない。それは、作者がこの小説に三つの時間を設定し、その上で「私」は反芻する過去の自分の在りようと今の自分の在りようとを区別して手記を綴らせているのだから、読者もまたそれぞれの時間つまり①「私」が先生に出会う前の先生固有の時間、②「私」の過去の時間つまり先生と出会う遺書を受け取るまで交流した約三年半か四年間の時間、③「私」が先生の遺書を読んで数年経て①②を反芻しつつ手記を書いている今の時間という三つの時間を細かく確認しながら考察する必要があるということである。<sup>1)</sup>これは大事な点だと思つので、拙論では以後必要に応じて②の「私」を「私1」、③の「私」を「私2」と表記する機会が多いことである。また「私2」が物語を構成する右記①②の事柄が終わつた後に数年経つてそれを反芻しつつ手記を書いたのと同じように、わたくしども現代の読者は三部構成の単行本『こころ』によつて物語全体を一旦読み終わった後に改めて作中に描かれた場面の意味を考察したり作品の構造を分析したりする場合は殆どなのであつて、日々連載される物語を追ひながら読んだ人々の場合とは読みの前提が違うということ、即ち作者が予め大枠の構想は持つていながら書き進める途中で予定外の

変更を余儀なくされる場合がありえたとしても、連載小説としてこれを読む人々には気付かれない場合があるが、現代の読者には分かることとあり得ることを念頭に置いて考察する必要があるということである。これも看過してはならない点だと考えるので拙論では新聞連載小説『先生の遺書』の例えば百十回はこれを110、単行本『こころ』では三部構成に従つて例えば「下 先生と遺書 五十六」はこれを下五十六で示し、両者は同じ場面であるので（110 下五十六）のよ

\*

わたくしは、物語の最後で先生の自殺を描くこの小説は作者・漱石による壮絶な殺人劇であるという読み方をしている。だが、小説の主題に絡めてこの作品が成立する状況に触れておこう。

大正三年四月二十日から『先生の遺書』という題で朝日新聞に連載され始められたこの小説が八月十一日の第百十回で連載を終わつて、九月に三部構成の単行本——やや細か過ぎることになるが、単行本の「序」に「箱、表紙、見返し、扉及び奥附の模様及び題字、朱印、検印とともに、悉く自分で考案して自分で描いた。木版の刻は伊上凡骨氏を煩はした」とあるように、漱石は実に細かな神経を使つてこの本を作っている。改めて点検してみよう。箱の表にはほぼ正方形に二重の野で囲つた中に（「心」と読ませたいのであろうが）書体としてどう

規定してよいか迷うような文字（「心」より寧ろ「尹」と読める）、箱の背は「心」、小説本体の表紙は太い野と細い野の二重の野で囲った中に「心」を配して笥子の一部を切り取ったような形で使い、表紙の背は仮名文字で「こころ」、本体の見返しは象徴的な二種類の円形模様を二〇個配し、遊びの次の口絵では黒色の目立つ木版画の中央に篆書体の「心」を赤い文字で配している。続いて二頁にわたる「序」、次に頁を替えて赤い野で縦長に囲った中に目次が書かれている。ここには題はなく「上 先生と私 一頁／中 両親と私 一四三頁／下 先生と遺書 二二三頁」、さらに頁を替えて本文第一頁には「こころ／漱石／上 先生と私／一」とあつて改行して周知の「私は其人を常に先生と呼んでゐた。」という冒頭第一文が来る——として岩波書店から刊行されたという事情を改めて確認する必要がある。わたくしはこの間に二つの問題が孕まれていると考える。

第一点目は次のことである。朝日新聞は大正三年四月十六日から「小説予告／心／漱石」を三日間載せ、十九日には「明日より掲載／心／漱石」として、ともに漱石が三月三十日に松山松之助に宛ててその小説の構想を伝えた手紙の一部を抜粋して載せている。即ち「今度は短篇をいくつか書いて見たいと思ひます。其一つ一つには違つた名をつけて行く積りですが予告の必要上全体の題が御入用かとも存じまじす故それを『心』と致して置きます」というのがそれで、「小説予告」「明日より連載」という見出しに続く本文は二つともこの手紙文を使っている。新聞に連載され始めたこの小説の各回の標題の要領を見

ると、最も右側に太い野で正方形に囲まれた内部の模様で嵌め込む形で漢字の「心」を配したロゴがあり、そのロゴの下に横書きで「石漱」、ロゴの左に「先生の遺書」、改行して「先生の遺書」の真ん中に連載回数を示す漢数字が来るように配されて（因みに大阪朝日の一四にはロゴがなく、五から配されるロゴは東京朝日のものとは異なる）、さらに改行して本文が始まる体裁になっている。この標題部分の要領は、漱石が松山松之助宛の手紙で書いたようなこの小説の構想を忠実に表しているとみられる。しかし「全体の題」は確かに「心」だが、連載小説の題としては「先生の遺書」であることを強く印象づける。作者に幾つかの短編を重ねて大きな「心」という作品にする予定があつたとしても新聞連載小説の標題としては「先生の遺書」なのであり、読者もこれを「先生の遺書」として毎日読んでいたと考える方が自然だろうと思わせる。これらのことから次のように考えてよいのではないか。即ちこの小説が『先生の遺書』という標題で連載されることになる一つの理由は、明治天皇の大葬の儀のあつた大正元年九月十三日の乃木大将夫妻の殉死事件——周知のように十七日に一斉に新聞に掲載された乃木大将の遺書が一層人々の衝撃と興奮をもたらした——をうけて鷗外が連載中の小説『灰燼』を中断して急遽『興津弥五右衛門の遺書』を『中央公論』十月号に載せたことを意識して付けられたかなり挑戦的な標題だったのでないかということである。

第二点目は、漱石が新聞連載小説『先生の遺書』を終わって、右に述べたような形の単行本にするときに重要な問題を未処理のまま進め

てしまったのではないかということである。むろん、漱石もこれについて無自覚だったわけではない。例えば、彼は単行本の「序」で「新聞連載を始める」当時の予告には数種の短篇を合してそれに『心』といふ標題を冠らせる積だと読者に断わつたのであるが、其短篇の第一に当たる『先生の遺書』を書き込んで行くうちに、予想通り早く片が付かない事を発見したので、とうとうその一篇丈を単行本に纏めて公けにする方針に模様がへをした。然し此『先生の遺書』も自から独立したやうな又関係の深いやうな三個の姉妹篇から組立てられてゐる以上私はそれを『先生と私』、『両親と私』、『先生と遺書』とに區別して、全体に『心』といふ見出しを付けても差支ないやうに思つたので、題は元の儘にして置いた」と説明し、また単行本を出すときの短い広告文では「自己の心を描へんと欲する人々に、人間の心を描へ得たる此作物を奨む」——この広告文には当時の意識的な人々の読書欲をそその効果を狙つた漱石らしい優れたセンスが覗かれる——と書いているが、小説の「模様がへ」をしたいきさつと単行本の主題に触れたこの二つの文章を重ねると、初めの構想が變形されて「短篇の第一に当たる『先生の遺書』を上・中・下の三部構成にして単行本化すること作品の構造とその主題の展開とに微妙だが確実に変化が生じていることを漱石自身が告げていることになる。先に細かく確認した単行本の箱・本体の表紙・見開き・口絵・目次・第一頁などに色々の絵を使ひまた書体の違う漢字や平仮名を使うなど標題表記が統一されていまいやうすは、作品の主題を暗示しようとする工夫とも見える反面で未

だ完全には整理がついていない漱石自身のやうすを示していると言えなくもない。読者に分かり難い作品だと感じさせる一つの原因はここにも現れていると言えようか。

第一の点は「遺書」とは何かという問題であり、第二の点はこの小説の主題と構造に関わる問題であろう。

ところで、わたくしは、先に漱石が単行本を出すときの短い広告文には「当時の意識的な人々の読書欲をそその効果を狙つた漱石らしい優れたセンスが覗かれる」と述べたが、これは次のように考へているからである。即ち、日本の歴史でも特異な明治という時代を懸念に且つ前のめりになつて生きてきた多くの人々が明治四十五年七月末の天皇崩御によつて突然時代の終焉を迎えたことを思わせられ、続く九月十三日の乃木大将夫妻の殉死事件は明治という時代の意味と懸命に生きてきた自分の生の意味の確認とを人々に強いる衝撃的な事件であつたと思われる。人々は、二度の対外戦争を経て曲がりなりにも世界列強の仲間入りを果たして諸種の近代化にも成功したという民族的高揚感を味わう一方で特に日露戦争を契機として露わになつた国家と個人をめぐる諸矛盾に決着がつけられていないと感じており、個人の肉体的な問題としてもここまで辛うじて抑封してきた心の疼き或いは「うしろめたさ」の感覚を抱え込んだままであることに気がつき始めていたと思われる。人々は時代の意味と己れの生の意味の確認を強いられ、己れが如何に生きるかの問題に直面していたのであつて、漱石はこゝう「自己の心を描へんと欲する人々」に向けてこの小説を提示した

のだと。この点で鷗外の『興津弥五右衛門の遺書』とは対峙させる必要があったのである。

『舞姫』（明治二十三年一月）や『普請中』（明治四十三年六月）を見るまでもなく、「富国強兵」「殖産興業」を掲げて近代国家の形成を目指す為政者たちの重要なブレーンとして生きてきた鷗外には、私的な情念を抑えつつ「我ならぬ我」を長く生きなければならぬゆえに常に彼特有の気概と悲しみがあり、殊に大逆事件が象徴した為政者による思想弾圧は彼を失望させていたと思われる。例えば『あそび』（明治四十三年八月）や『沈黙の塔』（明治四十三年十一月）に見える

「輜悔ぶり、『灰燼』（明治四十四年十月）にみえる徒労感、さらには嘉田貞吉が『尋常小学日本歴史』の教師用解説書で「南北朝の事は正閏

軽重を論ずべきにあらず」（それは）両皇統の御争ひなり」と書いていたことが明治四三年秋頃から問題視されて沸騰することになった南

北朝正閏論の混乱を山県有朋の意向に沿って収めるべく動いた鷗外が、<sup>3</sup> ヴィルヘルム二世と神学者ハルナックとの関係に「ドイツの強み」を見て「妄想」ならぬ宗教的イリュージョンを天皇制国家共同体

の維持装置として捉え直してみようとする五条秀麿を描く「かのやうに」（明治四十五年一月）には彼の中で科学者としての良心と為政者

のブレーン・国の藩屏としての良心とがせめぎあっているようすがよく現れている。<sup>4</sup> しかし、このような鷗外の苦悩と模索の中で突然起こった天皇の崩御は、（政治指導者たちの強引さを知っていただけ

に）彼に国家解体の強い危機感を抱かせまた己れの半生の努力をも水

泡に帰させるかとの不安を起こさせる。だからこそ、天皇崩御に続く乃木大将夫妻の殉死事件は彼を刺激してその素早い反応である『興津弥五右衛門の遺書』を書かせたのだと見なければなるまい。時代の終焉に遭遇して明治という時代の意味と己れの生の意味の確認を強いられることで心の疼き或いは「うしろめたさ」の感覚を抱え込んでいることに気付き始めていた人々に向けられた『興津弥五右衛門の遺書』は、国家と個人をめぐる伝統倫理に目を向けさせる誠に効果的な鷗外の問題提示であったといふべきであろう。

\*

『興津弥五右衛門の遺書』によって問題提示した鷗外の意図とその効果を見た後に漱石は、<sup>5</sup> 全体の標題が「心」となるはずの小説を構想しながらその中の一篇である『先生の遺書』を連載し始めるのだが、この標題には色々の仕掛けや意図が込められていると思われる。

その一つは見せかけの仕掛けである。つまり『先生の遺書』とすることで天皇の崩御と乃木大将夫妻の殉死事件に刺激されて漱石も鷗外と同じようにこの小説を書いたのだと人々が思い込むように見せかけたのである。新聞連載小説『先生の遺書』を読む人々にはそれが見せかけの仕掛けであると見抜くことは難しかったかも知れないが、単行本を読む者には容易に分かる。否、新聞連載小説として日々読んでいる人々の中でも例えば（「私」の母の名前は「御光」、妹婿の名前は「関

さん」であるが、物語の主題展開上はこれらの名前は無視してよいから、これを除けば）固有名詞を示さないこの物語で特に先生の妻に「静」という乃木大将夫人と同じ名前が与えられていること、或はこの物語の早い段階で「先生の亡くなった今日になつて、始めて解つて来た」（4 上四）とか「先生は美しい恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持つてゐた。さうしてその悲劇のどんなに先生に取つて見惨めなものであるかは相手の奥さんにまるで知れてゐなかつた。奥さんは今でも其れを知らずにゐる。先生はそれを奥さんに隠して死んだ。先生は奥さんの幸福を破壊する前に、先ず自分の生命を破壊してしまつた」（12 上十二）とあり、「私」の父が抱えている重篤な病気を天皇と同じ腎臓病に重ねてその父が天皇崩御の際に「ああ、ああ、天子様もとうとう御かくれになる。己も……」と歎き（41 中五）、さらに乃木殉死事件の際にも「乃木大将に濟まない。実に面目次第がない。いへ私もすぐ御後から」とうわごとを言う（52 中十六）というように天皇の赤子としての一般的な国民感情と乃木大将への共鳴感・尊敬ぶりを書いていること、その上で先生に「貴方にも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れませんが」と言わせながら自分は天皇崩御によつて「時勢遅れ」の人間になつたと考えるから乃木大将の遺書を読んだことをきっかけにして「明治の精神に殉死する積」の自殺を決心したのでと説明する遺書を書かせている（110 下五十六）ことなどを讀むと、（徐々にはあろうが）多くの読者は標題「先生の遺書」から手繰つて、漱石も鷗外と同じように乃木大将の殉死事件に刺激を受

け或は乃木大将夫妻の殉死に共鳴してこの小説を書いたのだと思つたのではないか。或は漱石が読者をしてそのように思わせるべく仕組んでいると見た人も多かつたのではないか。

もちろん、こうした見せかけの仕掛けを作つて「先生の遺書」を連載する漱石の狙いはその先にある。彼は、天皇の崩御と乃木の殉死事件で時代の意味と懸命に生きてきた己れの生の意味の確認を強いられる人々の心の疼き或いは「うしろめたさ」の感覚を衝きながら、鷗外の『興津弥五右衛門の遺書』に對峙する己れの『先生の遺書』を提示しようとしているのである。例えば、「先生の遺書」と題するこの物語でKの自殺の後に利己的であることを免れなかつた己れの罪を思い、「知らない路傍の人から鞭たれたい」「人に鞭たれるよりも、自分で自分を鞭つ可だ」「自分で自分を殺すべきだ」「仕方がないから、死んだ気で生きて行かう」「自殺より外にない」と苦悩してきた先生に最後に「私は新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行つたものを読みました。西南戦争の時敵に旗を奪はれて以来、申し訳のために死ぬ死のうと思つて、つい今日まで生きていたといふ意味の句を見た時」自殺を決意したのでと説明させる（110 下五十六）展開を見ると、「先生の遺書」は乃木大将の遺書を真中に置いて鷗外の『興津弥五右衛門の遺書』へと人々を架橋させ、漱石が鷗外と同じように二つの事件に刺激されてこれを書いたのだと思うように誘うだろう。しかし、それは先に述べたように見せかけの仕掛けなのであつて、作者の構想では先生の遺書は乃木大将の遺書を挟んで鷗外の『興津弥五右衛門の



「遺書」と対極にあるこの小説の主題と物語の展開を担って、先生と「私」、さらに作品と読者とを結ぶ鏝として仕組まれているものなのである。

問題は、この小説の主題と物語の展開を担い先生と「私」とを結びさらに作品と読者とを結ぶ鏝としての先生の遺書が乃木大将の遺書をどのように用いているかという点にある。少し注意すると、作者は乃木大将の遺書を実に巧妙に使っていること、それによって鷗外の『興津弥五右衛門の遺書』に対峙する己れの問題を提示していることが見えてくる。

すぐ前で確認したように、作者は、先生がKの自殺によって利己的な己れの「罪」を思い、「知らない路傍の人から鞭たれた」「人に鞭たれるよりも、自分で自分を鞭つ可だ」「自分で自分を殺すべきだ」「仕方がないから、死んだ気で生きて行かう」「自殺より外にない」と苦悩してきて、最後に「私は新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行ったものを読みました。西南戦争の時敵に旗を奪はれて以来、申し訳のために死なう死なうと思つて、つい今日まで生きていたといふ意味の句を見た時」自殺を決意したのだと言わせているのだが、よく見ると、これは先生が自殺を決意する本当の説明にはなっていないことが分かる。なるほど先生は「乃木さんは此三十五年の間死なう死なうと思つて、死ぬ機会を待つてゐたらしいのです」と自分の思いと乃木大将のそれを重ねている。だが、ここから先生が言おうとしていることは「生きていた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹

那が苦しいか」という方向に傾いてるのであつて、乃木大将の殉死と自分の自殺とを同じものとして意味付けしているわけではないといふことが分かる。作者はすぐ後で先生に「私に乃木さんの死んだ理由が能く解らないやうに、貴方にも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れません」ということをわざわざ書かせているが、これは作者が意図的に先生に言わせていると見るべきで、先生の言う「私に乃木さんの死んだ理由が能く解らない」とは、文字通り先生は「乃木さんの死んだ理由が能く解らない」が、自分は「明治の精神に殉死する積」で自殺するのだといふことを強調する物言いでなければならぬ。これによって作者は、先生がその自殺を乃木大将の殉死と同じやうに意味付けることを禁じて、先生は「殉死」がどういふものかを理解していなかったのだといふこと或は少なくとも先生の自殺が乃木大将夫妻の殉死とは異なる「明治の精神」を問題にするものであることを示そうとしているのだと考えることができる。乃木大将の殉死事件に衝撃を受けてこの小説を読んだ人々にとつても、乃木大将の遺書を読んだことをきっかけに「明治の精神に殉死する積」で自殺する決意をしたのだと説明する先生の「殉死」は乃木大将のそれとは意味が違ふと感ぜられたはずである。事の是非はともかくとして、一般的にいふ殉死とは個人が愛し仕えた「主人」など具体的な人間の死をうけてその死後の魂をも守り殉おうするために自ら命を捧げる行為でなければならぬ。乃木大将の場合は明らかに明治天皇の死に殉うものだからこそ衝撃的だったのである。ところが、先生には命を捧げるべき具

体的な人間の死がない。また「殉死」を思いつづくのも天皇の崩御をうけて「明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたやうな気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは畢竟時勢遅れだと妻に」に話したとき、妻が「では殉死でもしたら可からう」と調戲つたので「平生使ふ必要のない」ことばとして忘れていたのに「私は妻に向つてもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積だと答えました。私の答も無論笑談に過ぎなかつたのですが、私は其時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たやうな心持がしたのです」(110 下五十六)と説明する。だから先生は「乃木さんの死んだ理由が能く解らない」と言わざるをえなかつたのであり、妻にさえ打ち明けられない自殺を無理にでも決行するには「古い不要な言葉に新しい意義を盛り得た」と考えることで「明治の精神に殉死する積」だというように、読者には掴み難いことばを使うしかなかつたのだと思われる。このように見えてくると、先生が自殺を決心するのに必要としたのは乃木大将の遺書にあつた「死ぬ機会を待つてゐた」という部分だけであつて、それを捉えて「生きてゐた三十五年が苦しいか、また刀を腹に突き立てた一刹那が苦しいか」と想像を広げて自殺をするきっかけにしたのだと言えればよかつたのだ。否、作者が先生をしてそう言わしめているのだ。

やや固執し過ぎる感はあるが、自殺を決意するきっかけになつたものと説明して先生が乃木大将の遺書を要約しているところを改めて振り返つてみよう。

乃木大将の遺書はその全文を大正元年九月十七日の各新聞が大々的に掲載しているのだが、先生が自殺を決意するきっかけになつたと説明するために必要だつたのは乃木大将の遺書全十条のうちの第一条即ち「自分この度御跡を追い奉り自殺候処、恐れ入り候儀、その罪は輕からず存じ候。しかる処、明治十年役に於て軍旗を失ひ、その後死に処得たく心掛け候もその機を得ず、皇恩の厚きに浴し、今日まで過分の御優遇を蒙り、追々老衰もはや御役に立つの時も余日なく候折柄、この度の御大変、なんとも恐れ入り候次第、ここに覚悟相定め候事に候」(傍線 黒木) の特に傍線部分だけだつたことが分かる。

考えてみると、実は九月十八日に行われた乃木大将の葬儀に参列し恐らく夜八時半過ぎに帰宅してその夜のうちに『興津弥五右衛門の遺書』を書き上げる鷗外にとつても、乃木大将の遺書の中で必要だつたのはその第一条だけであつた。ただ、鷗外は日露戦争から凱旋した折の乃木大将と明治天皇との間の秘話つまり「日露の役、乃木將軍が旅順及び奉天大会戦に殊勲を奏して凱旋せしも、多く死傷者を出だせしを恥じ、身を以て上は聖天子に、下は一般國民に謝せんとの念切にして、凱旋の日闕下に復命し特に優渥なる御沙汰を拝したるも、鞠躬如として御前に拝伏し、『臣希典不肖にして、陛下の忠良なる將校、士卒を旅順に於て多く失ひたり。この上はただ割腹して、罪を陛下に謝し奉らんのみ』と聞え上げたるに……將軍を御呼び止めたまひ『卿が割腹して朕に謝せんとの衷情は、朕よくこれを知れり。しかれども卿は輕々に死すべきにあらず、長く朕に侍して忠を擢んずべし』との意

味の御沙汰あらせられたれば、流石の將軍も君恩の渥きに感泣し顔色蒼然……陛下の御知遇に感激して、身も心もともに先帝に捧ぐべく、ますます決心を固めたる次第なるべく」（大正元年九月二十四日 東京日日新聞、傍線 黒木）といういきさつも新聞発表前に石黒男爵から聞き知っていたはずで、だからこそ乃木大将の遺書の第一条の裏に隠されているこの秘話を使つて弥五右衛門に次のように書かせることができたのだと思われる。即ち「仮令主命なりとも香木は無用の翫物に有之、過分の大金を擲候事は不可然」と言う横田清兵衛に対して「主命たる以上は人倫の道に悖り候事は格別、其事柄に立入り候批判がましき儀は無用なり」と主張する弥五右衛門が感情のもつれから横田を殺害してしまい、そのいきさつを報告して「殿」に詫びるに当たっては「主命大切と心得候為とは申ながら御役に立つべき侍一人を討ち果たし候段、恐入り候へば切腹被仰付度」と申し出たのに、「殿」は「総じて功利の念を以て物を見候はば世の中に尊き物は無くなるべし……斯程の品を求め帰り候事天晴」と誉めて「一命を御救助被下」（傍線 黒木）たこと、それゆえに自分の切腹は「此再造の大恩ある主君」の「御恩」に報いるための殉死なのだ。つまり弥五右衛門は専ら臣として殉死することのできる己れの幸福を綴っているのである。特に当時の諸新聞が例えば「古武士の権化たる大将夫妻」「鯁骨清廉の国士たる將軍」「貞烈無比、婦人の鑑たる大将夫人」（九月十四日 国民新聞）、「武士の模範となり、武士的教育を後進に施された將軍」「忠君の精神発露」「將軍の男として、夫人は女らしい妻として、今の

情弱な世に好模範」（九月十六日 東京朝日新聞）、「一点なら間然する所なき立派なる武士的最期」（九月十八日 東京朝日新聞）、「忠勇高潔なる乃木將軍と貞操無比なる同夫人」（九月十九日 東京朝日新聞）などと喧伝することで人々の興奮を作つていく状態の中で、乃木大将の筆法に沿つて鷗外が書いた『興津弥五右衛門の遺書』は時代の意味と懸命に生きてきた己れの生の意味の確認を強いられてそれだけが抑封している心の疼き或は「うしろめたさ」の感覚を衝いたのだと言わなければならぬ。鷗外は、乃木大将の遺書と弥五右衛門の遺書とを重ねることで弥五右衛門の幸福な殉死を称揚し、同じように天皇の臣として幸福な殉死を遂げた乃木大将を称揚しているわけで、このようにして国家と個人をめぐる伝統倫理に人々の目を向けさせたのである。もちろん、それは天皇の崩御が国家解体をもたらすことを案じた鷗外の危機感から出た問題提示であるが、彼と同じような危機感を持った人は多かつただろう。だからこそこの小説が巻き起こした反応も大きかつたのである。

しかし、弥五右衛門が「殿」の大事な臣を殺した己れの罪を「殿」に報告するときの彼の論法に関してわたくしは敢えて言つてみたい。やや意地悪く言うと、そもそも弥五右衛門と清兵衛の喧嘩は感情をコントロールできなかつた武士の肉体的未熟さが原因である、しかるに弥五右衛門はそれを「殿」への忠誠心の優劣の争いであつたと言ひ換えて「殿」の大事な臣を殺したのは自分の忠義の心の方が勝つていたからなのだと言つているに過ぎないのではないか、そしてまた「殿」

が彼の罪を許したのも弥五右衛門の論法に乗せられた結果としてなされた「殿」の「御愛」ではないかということである。つまり弥五右衛門の論法は組織社会のどこでも見られる同僚をけなすことで権力者に取り入る手合いの論法だとも言えるのである。弥五右衛門の遺書と乃木大将のそれとを重ねて乃木大将の殉死をここまで意地悪く見ることが異論はあろう。そしてわたくしは、漱石が弥五右衛門の遺書をこのように意地悪く見ていたと考える証拠を持ち合わせているわけでもないのだが、こういう点も一応は言っておく方がよいと考えるのである。

鷗外の意図を見抜いていた漱石は、先生にわざわざ「私に乃木さんの死んだ理由が能く解らないように、貴方にも私の自殺する訳が呑み込めないかも知れません」と言わせ、しかもそれが「明治の精神に殉死する積」の自殺を決意するきっかけになったのだと言うために乃木大将の遺書を要約させる。もちろん、先生には乃木大将夫妻の殉死を伝統的な倫理を回復する方向へ向ける価値観の問題として称揚する積りはないはずだ。乃木大将の遺書を読んだことがきっかけになって自殺する決心をしたと説明する先生にとって必要だったのは乃木大将の遺書の第一条のうちでも一部分だけだということを先に述べたが、先生が乃木大将の遺書から「乃木さんは此三十五年の間死なう死なうと思つて、死ぬ機会を待つてゐたらしいのです」ということを引出すのはよいとしても、それに続く「生きてゐた三十五年が苦しいか、また刃を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか」という部分は先生が己れの自殺願望にけりをつけるために乃木大将の遺書から都合よく膨らませた

想像である。先生が自殺を決心するきっかけを欲していたことは分かる。しかし、新聞で乃木大将の遺書を読んだことがきっかけになったというのは飛躍であり正確な説明にはなっていない。これは先生の苦悩を描いてきた物語の内容からみても逸脱する。なぜなら、先生の自殺は、乃木大将夫妻の殉死とは違つて、徹底的な挫折者・敗北者としてのそれではないはずだからである。先生もその説明の仕方にて飛躍と逸脱があることを全く自覚しなかつたわけではないが、作者が先生に「私に乃木さんの死んだ理由が解らないやうに、貴方にも私の自殺する訳が呑み込めないかも知れません」と言わせていることは確実で、このことを見落としてはならない。

にも拘わらず、漱石が乃木大将の遺書を読んだことをきっかけに先生の「明治の精神に殉死する積」の自殺をさせるのはなぜか。それは、乃木大将夫妻の殉死とこの事件を喧伝する新聞や雑誌の論調と鷗外の『興津弥五右衛門の遺書』による問題提示とを批判すること即ち明治の社会と人間の根底を抉ることで己れの問題を提示したいという思いが漱石に強くあつて、その方法として乃木大将夫妻の殉死とは全く対極にあるノン・ヒーロー（先生）の無惨な死を際立たせて、「自由と独立と己れ」の幸福を求めたゆえにエゴイズムの罪に囚われて挫折し妻にも打ち明けることができない苦悩を抱えたまま自殺する先生の問題こそが明治人の本当の問題であり、またこの時代を超えて生きなければならぬ人間の真の課題であることを提示することにあつたからだと考えるのである。

これについてはこの小説の外側から補足して漱石の意図を推測して  
 みる必要があるかも知れない。例えば、漱石は早く『趣味の遺伝』  
 （明治三十九年一月）で主人公「余」が偶々新橋駅頭で凱旋する乃木  
 大将の日焼けして疲れた表情を目にする場面を描いていた。この場面  
 の「余」の視線が、多くの兵士のみならず二人の男児をも戦死させた  
 大将の悲しみを捉えていることは確かであり、従つて戦鬪を指揮した  
 乃木大将に対する漱石の同情を窺うこともできるのだが、この短篇小  
 説の肝心な点は「余」が戦争の実態を「狂気」として捉えていること  
 にあつた。その圧倒的な迫力は冒頭部分つまり戦争は「人を屠りて餓  
 へたる犬を救へ」「血を啜れ」「肉を食らへ」「肉の後には骨をしやぶ  
 れ」と叫ぶ狂える神の所業だと「余」が幻視するところであつて、こ  
 れがあつて累々たる死体の向こう側で友人「浩さん」が無惨な戦死を  
 遂げる現場を想像し、一人子「浩さん」を亡くした母親の物静かな話  
 ぶりの後に「浩さん」と浅からぬ因縁にあつたとおぼしき娘の墓参の  
 ようすを目にするという展開なのだが、これなどは漱石の戦争嫌悪の  
 気分を現して実に余韻に富む物語になつていた。或は例えば「晩天子  
 重患の号外を手に入す。尿毒症の由にて昏睡状態の旨報せらる。川開き  
 の催し差し留められたり。天子未だ崩せず川開を禁ずるの必要なし  
 ……当局者の没常識驚ろくべし。演劇其他の興行もの停止せぬとかに  
 て騒ぐ有様也。天子の病は万臣の同情に価す。然れども……当局の之  
 に対して干渉がましき事をなすべきにあらず。もし夫臣民中心より遠  
 慮の意あらば営業を勝手に停止するみ随意たるは論を待たず。然らず

して当局の権を恐れ、野次馬の高声を恐れて、当然の営業を休むとせ  
 ば表向は如何にも皇室に対して礼篤く情深きに似たれども其実は皇室  
 を恨んで不平を内に蓄ふるに異ならず……新聞紙を見れば彼等異口同  
 音に曰く都下闕寂火の消えたるが如しと。妄りに狼狽して無理に火を  
 消して置きながら自然の勢で火の消えたるが如しと吹聴す。天子の徳  
 を頌する所以にあらず」（明治四十五年七月二十日 日記）、さらに例  
 えば天皇崩御の後に「明治のなくなつたのは御同様何だか心細く候  
 ……国民は此度の事件にて最もオベツカを使ふ新聞に候オベツカを上  
 手の編輯といへば彼の右に出るもの無之候 いづれにしても諸新聞の  
 ○○及び宮庭に対す〔る〕言葉使ひ極度に仰山過ぎて見ともなく又読  
 みづらく候」（大正元年八月八日 森田月宛書簡）と書いた漱石に、  
 乃木大将夫妻の殉死を称揚して伝統倫理を回復することを求めるとか、  
 これを日本人の生の最高価値として賞讃する諸新聞の論調に同調する  
 気持ちがあつたとは考え難いのである。

\*

この小説の人物造型はどのようになつてゐるかを点検してみよう。  
 「明治の精神」に関連させてこの物語に登場する人物たちから逆照す  
 ると、漱石の明治人の捉え方は次のようなものだったといえるのでは  
 ないか。即ち「官武一途庶民ニ至ル迄其志ヲ遂ゲ」云々という五箇条  
 の御誓文に始まる明治という時代は、多くの人々にとつて自らの生を

自ら演じることのできる望ましい舞台の幕開けであった（イ）。財能ある地方青年は古い家を離れて東京の大学に進んだ（ロ）。財能に恵まれず強靱な肉体を武器にできる次男・三男たちは労働者となって都市に集まった。ともに立身出世願望を秘めた幸福追求の野心を持ち（ハ）、そうして成功した或る者は官吏や実業家となり垢抜けした女を妻にして都会に家庭を作った（二）。失敗した或る者は「敗残者」「余計者」として舞台を降りるか（ホ）、帰郷して笑いにされ挙句には満州に夢を馳せることもした。しかし先に述べたように、天皇の崩御によって時代の終焉を思わせられ続く乃木大将夫妻の殉死事件の衝撃によって明治という時代の意味と懸命に生きてきた己れの生の意味の確認を強いられることになった人々が気付いたのはそれぞれが胸底深く心の疼き或いは「うしろめたさ」の感覚を抱え込んでいるということであった。この心の疼き或いは「うしろめたさ」の感覚の内実をこの作品に沿って細かくいうと、例えば彼らが捨てた故郷には子供に見捨てられ今や老境を迎えて片方の死後にたった一人で残されるであろう片方の将来を心配しなければならぬ両親が不安と淋しさに耐えて生きている（ヘ）。そのような両親（ト）を捨ててきた子供としての罪責感（チ）、競争社会ゆえに避けられなかった友人・同僚への裏切り意識（リ）、また異質な環境に育った男女が作った家庭における愛の不充足感などであり（ヌ）、結果として孤独感と淋しさを抱えて佇立するしかない——明治四十四年八月の講演「現代日本の開化」に従えば西欧社会が三百年費やした近代化を僅か五十年で達成しよう

として「上滑りに滑ってきた」結果の「神経衰弱」に陥っている（ル）——明治人ということになるようだ。

このような捉え方によって、漱石は（イ）を「自由と独立と己れに充ちた現代の我々」と言い換えて、（ロ）（ハ）から先生とKと「私1」——先生とKは「六畳間の中では、天下を睥睨するやうな事を云って」「偉くなる積り」でいた」（73 下十九）。奥さんは学生時代の先生が「私の希望するやうな頼もしい人だった」から結婚したのだという意味の話を（18 上十八）。「私1」は大学を卒業すれば「著名の士」になれると家族や村人に期待されている。「私1」もそれを否定はしない（42 中六）——（二）から先生と「私1」——お嬢さんは東京生まれである（12 上十二）。「私1」も「広い都を根拠地として考えてゐる」のだから近い将来にそうしたいと望んでいるだろう（42 中六）——（ホ）から先生——Kの自殺後先生は余計者として舞台を降りており遂には自殺する——（ヘ）（ト）から「私1」の父親とKの両親や養父母——「私1」の父親は「小供に学問をさせるのも好し悪しだね。折角修業させると、其小供は決して宅へ帰つて来ない。これぢや手もなく親子を隔離するために学問させるやうなものだ」と嘆き（43 中七）、「御前が東京へ行くと宅は又淋しくなる。何しろ己と御母さん丈なんだからね。そのおれも身体さへ達者なら好いが、この様子ぢや何時急に何んな事がないとも云へないよ」（44 中八）とか「おれが死んだら、どうか御母さんを大事にして遣つてくれ」（46 中十）と一人田舎に残されるだろう妻を案じる。跡を継が

せるためにKに学資を出し続けた養家の医業は恐らく絶えることになるだろうし、Kの両親は田舎でずっと肩身の狭い思いをさせられるはずだ——、(チ)からKと「私1」——両親が大学入学前に死亡したことで叔父に財産を横領されたと思ひ込んだ先生はその後は血縁や故郷を激しく憎む(63 下九)けれども、Kは「道に精進する」ために早くから両親や養父母を切り捨てており邪魔な存在と考えている。Kが大学卒業直前に先生の下宿で自殺する(102 下四十八)のは子供に裏切られた両親や養父母の怨念に責められる「孤独」感のためとはいえなくはない。「私1」は「父が居なくなつて母一人が取り残された時の、古い広い田舎家を想像して……其儘立ち行くだらうか。兄は何うするだらうか。母は何といふだらうか」(39 中二)とか「学問をした結果兄は今遠国にゐた。教育を受けた因果で、私は又東京に住む覚悟を固くした。斯ういふ子を育てた父の愚痴はもとより不合理ではなかつた。永年住み古した田舎家の中に、たつた一人取り残される母を描き出す父の想像はもとより淋しいに違ひなかつた」(43 中七)と考える。兄が大学を出て仕事をしない先生を「キゴイストだ」と批判しながら自分の親捨てのエゴイズムに気付かないこと不快を感じる(51 中十五)のも「私1」の中に親捨ての罪責感が自覚されていることをいうためである——、(リ)から先生とK、(ヌ)から先生夫妻、(ル)から先生、というように誠に解り易く造型しているのである。

漱石は、『吾輩は猫である』以来一貫して「自由と独立と己れとに充ちた現代の我々」の問題を追求してきた。天皇の崩御と乃木大将夫

妻の殉死事件に反応した『興津弥五右衛門の遺書』で問題を提示した鷗外の意図を理解していた漱石は、「自由と独立と己れ」を求めた結果エゴイズムの罪に囚われて遂には自殺する先生の心を抉って、挫折者・敗北者というしかない明治人の生き方の問題とそれを克服する課題とを読者に提示したのである。

\*

既に繰返し述べたように、先ずこの小説の標題のつけ方は天皇の崩御と乃木大将夫妻の殉死事件に刺激されて『興津弥五右衛門の遺書』を書いた鷗外と同じように漱石もまた二つの事件に刺激されてこれを書いたのだと人々に思わせ、人々をしてこの小説を鷗外の『興津弥五右衛門の遺書』へと架橋させるために漱石が仕組んだ見せかけの仕掛けなのだという事を見ぬればよい。だが、見せかけの仕掛けとして使われる先生の遺書が実はこの小説の主題を担い物語の構造を支える錠なのだということが大事なのだ。つまり先生の遺書は、一つには物語の内部において先生と「私」とを繋ぐ錠になつていてということ、二つには読者と先生さらに読者と手記を書いている「私2」また作者と読者とを繋ぐための錠として作者が使っているのだということである。

前者については物語内部の問題として容易に分かる。例えば、事柄の渦中にある当事者は当面の問題を正確に捉え難いとか或いは深刻な

失敗を味わった者にはたとえそれが過ちであつたと分かつていてもあつたことをなかつたことにすることはできないということなどは一般的に言われており、また当事者がそのトラウマから自力のみで抜け出すことは難しいということは精神科医の言うところであるが、深刻な失敗を経験する先生の問題を物語の中で抉るには事態を当事者の内側と外側の両面から見ることでできる人物が必要なわけで、「記憶してください。私はこんな風にして生きて来たのです」（109 下五十五）と言つて遺書を書く先生とそのような先生と実際に交流する時間を共有し得た「私1」（後に先生の遺書を受取つて事柄を反芻する「私2」を含めて）とが造型されなければならないのである。このようにして先生の遺書は先生と「私」とを繋ぐ重要な鏝になつて小説の内部構造を支えていることを理解することができるのである。

後者については若干の説明が必要であろう。物語の内部問題として既に明らかのように、作者が「自由と独立と己れとに充ちた」はずの明治人を立像として描くためには、先ず自ら「最も強く明治の影響を受けた」（109 下五十五）という先生、次に過去の経験とそこから生まれた人間観に囚われて「自分で自分が信用出来ない……自分を呪うより仕方がない」と言う先生に近づいて「先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです」（31 上三十一）と言いながら先生夫妻と具体的に交流をする人物「私1」の客観的な目を設定しなければならぬ。そして「勇気のない」先生の本心を引出すには「私1」が「真面目」な人物として先生の信頼を得るまでの時間が共有さ

れた後に先生が「私1」に宛てて先生の生の総決算である遺書を書かせるという手続きがなければならないのである。もちろん、作者の構想したこの小説では、先生自身がその心を抉つてエゴイズムの罪を告白的に綴る遺書を提示すればそれでよいということではない。先生が願っているように、妻にすら語れない秘密を明かす先生の遺書を受取つた「私1」が明治人のエゴイズムの問題さらには現代日本人の生の課題を精確に捉えてその認識を綴る「私2」の手記には先生の挫折を克服する思想或は手がかりのようなものが僅かでも書かれなければならないのである。もちろん、これは既に述べたように物語内部の問題である。しかし、作者はこの物語の読者に「私」と同じ姿勢で先生の生に対峙させて真の読書行為が成り立つようにならなければならない。先生の遺書はこのためにも必要だったのである。先生にとつて「私1」が「あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと云つたから」「何千萬とある日本人のうちで、ただ貴方丈に、私の過去を物語たいのです」と特別に呼びかけ得る相手であつたのと同じように、漱石が『先生の遺書』の読者として想定しているのは、懸命に且つ前のめりに生きてきて天皇の崩御によつて時代の終焉を思わせられまた乃木大将の殉死事件の衝撃によつて辛うじて抑封していた心の疼き或は「うしろめたさ」の感覚を抱え込みながら改めて時代と己れの生の意味の確認を強いられている中で「どの位人が自分の感化をうけて、どの位自分が社会的分子となつて未来の青年の血肉となつて存在し得るかをためてみたい」（前出 狩野亮吉宛書簡）という漱石の



意欲を正しく受け止めて真の読書行為を成り立たせることのできる読者でなければならぬからである。

わたくしはこの点を次のように考える。即ち作者は、読者がこの問題に取組むためには、物語を構成する素材として（A）「先生の遺書」、（B）「私1」が先生と具体的に交流し共有した時間の中で「私1」は先生をどう見ていたのかというその当時の「私1」の認識、（C）読者よりも数年前にそれを読んで今事柄を反芻しつつ綴っている「私2」の手記、この三点を見ることができるようになっているということである。作者がこういう工夫をしたのは、それによって読者もまた①先生の遺書によって「自由と独立と己れとに充ちた」はずの明治人の挫折と自殺の問題を精確に捉え、②同時に時代の終焉を思わせられて明治という時代の意味と懸命に生きてきた己れの生の意味の確認を強いられているゆえにそれぞれが抱え込んでいる心の疼き或いは「うしろめたさ」の感覚を深く抉る（ここで先生と読者との一次的な対話が生まれる）、③先生の問題と己れが抱え込んでいる心の疼き或いは「うしろめたさ」の感覚とを比較点検しつつ「私2」の手記を読む、④「私2」の事態の捉え方と読者自身の捉え方とを比較点検しながら「私2」との間に対話を始め、⑤「私2」との対話をしつつ「私2」とともにそれぞれに己れの生の次の一步を模索する——このようにしてあるべき真の読書行為が目指されているのである。作者がこの小説の主題を担い物語の構造を支えてしかも物語（もちろん登場人物を含めて）と読者、また読者と作者とを繋ぐ鏝として先生の遺書を構想した

のは、読者との間でこのような関わり方を作り出すためなのだ。

ただ、わたくしは拙論の「はじめに」のところで「主題の深まりという点からその構造を見ると、分かり難い小説だという印象がぬぐえない」と述べた。この印象は変わらない。また手記に見られる「私2」の認識や物言いはあたかも四十歳を越えた人つまり漱石自身のそれではないかと思わせるような所があつてこれも気になる。なぜそうなのか。

作者が明治の人間の心を抉る先生の遺書を「私1」に送り届けるように物語を構想したことは間違いないだろう。だから、物語の早い段階で「真面目に人生から教訓を受けたいのです」と先生に迫った「私1」に対して「よろしい……話ませう……しかし今は話せないんだから、其積であってください。適当の時機が来なくちや話さないんだから」〔31 上三十一〕という場面を描いたことは分かる。だが、この遣り取りが主題を深めるように物語を展開させる方法を規制しているようである。先生の遺書は、物語内部で先生がその命と引き換えに「私」と先生とを繋ぐために用いた鏝だったとしても、これは先生の「遺書」であつて先生から「真面目に」「教訓を受けたい」と願った「私1」からの反応つまり「私」との対話を拒否しているのだから、これをうけて先生・「私」・読者・作者という四者の関わりの中で特に「私2」と読者とを繋ぐ鏝として先生の遺書を働かせるには「私2」にこれをどう処理させるかという問題が生じたはずで、作者はここで随分苦勞していると思われる。作者が、先生と読者さらに「私2」と読

者とを繋ぐ鏡として先生の遺書と「私2」の手記を使って読者における真の読書行為を成り立たせることつまり右に述べた①～⑤が十全なものになるためにはどうするか。作者が先生と読者とを対峙させるためには、「私2」は先ず先生の遺書の全体を——たとえ引用という形であるとしても——それとして提示しなければならぬのであって、それ以外の方法はなかっただろう。また先生との対話を拒否された「私1」が先生の生と死から教訓を得たことを描くためには、先生夫妻と実際に交流した過去の時間を精確に回想ししかも先生が一方的に示した遺書についても時間をかけて反芻させ、その後「私2」は手記を綴って事柄についての己れの認識を提示して読者と繋がるようにしなければならぬだろう。先生と読者とを対峙させるために先生の遺書の全体を示すように工夫した作者は、次に読者が「私2」と同じように先生の生と死を受けて「私2」とを対等の立場で対話しつつそれぞれの課題に取組むことを考えて、「私2」に抑制を課しているのではないか。つまり④において「私2」がその認識を読者に強制したり、読者自身が先生の生と死の問題に直面することでそれぞれの課題と取組む姿勢を歪めないようにしたのではないか。物語の展開と主題の深まりという点からこの小説は分かり難い作品だと感じる理由の一には、こういう問題が絡んでいるようにも思われるのである——このことは文体の問題に絡めて後に触れる——。

もちろん、例えばこの小説が生まれる現実的な時間に即して、物語の時間では「私1」先生の遺書を受取ったのは大正元年九月下旬で

あってそれから約一年半後の大正三年四月二十日から連載の始まる『先生の遺書』という手記の体裁で「私2」に先生の問題を反芻させ先生の挫折と自殺とを回避或いは克服するための解答とか思想を確かなものとして探り当てさせるには実際の時間距離としては短か過ぎる（現実の約一年半の時間を「私1」が先生の遺書を受取ってから「私2」が手記を書き始めるまでの時間と見做す必要のないことはいまでもないが）ために主題の深め方が徹底できなかったのだとする考え方もありうる。しかし、それは別問題であり、先生の遺書をそっくり提示してそれを受取ってから数年後の「私2」が手記を書いているという作品の構造に絡めて主題の展開とその深まりを点検してみようとするわたくしの問題意識からはずれてしまうので敢えて触れない。

ここでは、先生の遺書は物語の内部では先生と「私1」とを繋ぐ鏡であり、同時に読者が物語の中まで出入りすることで真の読書行為を成り立たせる鏡として先生と「私1」さらには作者と読者という四者を繋ぐものになっていることを明らかにした。これによって鷗外の『興津弥五右衛門の遺書』による問題提示と厳しく対峙する己れの問題を提示しようとする漱石の狙いが達成できているか否かはさらに細かな文体分析を通じて作品そのものに語らせなくてはなるまい。

## 注

(1) この点は、例えば小森陽一氏の「『こころ』を生成する心臓」〔成城国文学〕一九八五年三月、同年十二月かかなりの書き直し

をして「ちくま文庫『ころ』解説」や田中実氏の「『ころ』という掛け橋」(『日本文学』一九八六年二月、後「小説の力」一九九六年二月 大修館書店刊)などの論考をうけて今では論者の共通理解になっている。わたくしもそれに沿っている。

(2) 単行本『ころ』は『名著復刻全集 近代文学館』(昭和四四年四月 日本近代文学館刊)を使用した。なお、荒正人氏は単行本『ころ』の標題に触れながら、漱石は新しい倫理を「乃木大将の殉死のなかに見出さうとした」と言い、乃木殉死事件に対して鷗外と漱石が同じような意味付けをしたという見解を示した(『漱石文学全集 6巻』解説 一九七一年一月 集英社刊)が、わたくしは荒氏の見解には賛成できない。

朝日新聞の連載小説『先生の遺書』は『漱石新聞小説復刻全集 8 先生の遺書 『ころ』原題』(平成十一年九月 ゆまに書房刊)を使用した。この復刻は東京版に依っており、大阪版との異同についても必要なことは指摘している。

(3) 明治四十四年二月二十三日の鷗外日記に「賀古がきて市村・井上と共に古希庵行きと南朝正統論をなすように告げる」とあり、二十七日には「賀古が来て南朝正統論同志者の行動を告ぐ」とある。

(4) 『近代文学注釈大系 森鷗外』(一九六六年一月 有精堂刊)の解説で三好行雄氏は、秀磨の考え方式に対して綾小路が繰返し「駄

目、駄目」と言っていると鷗外の苦悩が現れていると述べているが、この指摘は留意したい。

(5) 管見では遺書の問題に関わる漱石の発言は驚くほど少ない。二の発言を見ても彼らしい個性や見解は見られない。例えば、明治四十三年七月十九日に「文芸とヒロイック」、二十日に「艇長の遺書と中佐の詩」を朝日の文芸欄に載せている。そこで佐久間艇長の遺書が「今日の日本に於て猶真個の生命あるを事実の上に於て証拠立て」たものだと称揚する。しかしこの論は、旅順港閉鎖で喧伝された広瀬中佐の詩を取り上げて批判することに主眼が置かれている。それによると「道義的情操に関する言辞は其言辞を実現し得たるとき始めて他をして其誠実を肯はしむるのが常である……微なる欠陥は言辞詩歌の奥に潜むか、又はそれを実現する行為の根に絡んであるか何方かであらう……余は中佐の敢てせる旅順閉塞の行為に一点虚偽の疑ひを挟むを好まぬ……だから好んで罪を中佐の詩に」見る。なぜなら中佐が「作らないでよいものを作つてある」からだと述べている。

(6) 大正元年九月十三日の鷗外日記には、彼が大葬の儀に参列して「翌日午前二時青山を出でて帰る。途上乃木希典夫妻の死を説くものあり。予半信半疑す」とあり、十八日の日記には「午後乃木大将希典の葬を送りて青山斎場に至る。興津弥五右衛門を帥して中央公論に送る」とある。

(7)

栗坪良樹氏「興津弥五右衛門の遺書」——遺書の形式とその弁明——」(『森鷗外研究』6 平成七年八月)に示唆をうけた。ただ、わたくしが「意地悪く言うと」と留保を置いてこのことを指摘してみたのは、鷗外自身が主従間の誤魔化し合いの問題には直ぐ気付いたらしく直後に権力者の責任逃れを追及して叛乱を起こす『阿部一族』(大正二年一月)を書いていることが念頭にあったからである。

## The Relationship between “The Memoirs” and “The Will”.

—The Style and the Structure on Souseki's novel *Kokoro*—

Akira KUROKI

This article is the first in a live which is intended to clarify the style and structure of Natsume Souseki's novels, *Kokoro*. This novel was originally published as a series by the Asahi Shinbun between April 20 and August 11, 1914 under the title, “The Will of the *Sensei* (Teacher).” The title of this serial novel suggests that Souseki was attempting to counter Ougai's novel, “The Will of Okitsu Yagoemon,” under the controversial circumstances surrounding the death of Emperor Meiji and General Nogi's immolation. “The will” was apparently the tool through which Souseki intended to mediate between the *sensei* (Teacher) and Okitsu Yagoemon. However, by “the will,” the author had as his real aim distinguishing between the defeat of the egoistic man who had failed in love and life in the Meiji Period and modern man in the subsequent period.

---

**Key words;** “The will of the *sensei* (Teacher), Ougai's novel “The Will of Okitsu Yagoemon,” the death of Emperor Meiji, General Nogi's immolation, Apparently the Tool Through which